

2020年
新年号
第 200 号

飛鳥 かわら版

ASUKA KAWARABAN

発行所
飛鳥出版室
発行人 永野 正将
〒780-0945 高知市本宮町65-6
電話 088-850-0588
e-mail:info@asuka-net.jp
http://www.asuka-net.jp



1986年創刊の「かわら版」、34年の歴史を紡いで来ました。
その中の6号分をお目にかけます。

祝 200号！皆様からのメッセージ …… 2～4
おのころじま奮染記 18 ……田島征彦 5
絵本が結ぶ日韓交流 ……大澤重人 6～7
いろいろかいろ 芸 ……安藝真一 8

キルギスタンからコンニチハ ㊦ ……氏原名美 9
出版物紹介 …… 10
飛鳥だより …… 11
わが家の太郎 ㊦ ……永野雅子 12

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

祝 200号!

皆様からの メッセージ

「かわら版」200号を記念して、お世話になった方、元社員、現スタッフからお祝辞をいただきました。

懐かしい
「愛すべき酔っぱらいに捧ぐ…」

元産経新聞
司馬遼太郎担当記者

窪内 隆起

「かわら版」が200号に到達、おめでとうございます。毎号、各界の人たちの思考に勉強させてもらい、雅子奥様と太郎君との通い合いに心を温めさせてもらいました。

四国写植時代の昭和62(1987)年に、エッセー集「たて糸よこ糸」を出版して頂き、それが県出版文化賞を受賞しました。

和宏社長が大変喜ばれ、ある夜、一席設けて頂いたことは今も感謝の念が消えません。

昭和64(1989)年の、森岡雅子さん(現姓・松田)の「愛すべき酔っぱらいに捧ぐ…」の出版に際しては、西村多津子さんから序文を依頼され、書かせてもらいました。この本がTBSの「東芝日曜劇場」になり放送されたことは懐かしい思い出です。「かわら版200号」は当然、途中のひ

と区切りで、永続への一段階でしょう。飛鳥京のごとく、また元氣な鳥のごとく、飛び続けられることを期待申し上げます。

古い記憶

元飛鳥取締役 楠本 正躬

長い年月の歴史を重ねた200号、その努力は並々ならぬものがあつたと思います。おめでとうございます。

思えば、若いころ、先代の永野和宏社長に巡り合い、その先見性に感銘を受け、教えを請うことも多く、お互いに酒を酌み交わしながら印刷業界の在り方や改革の内容を論じたことを昨日のように思い出します。「活版の時代は終わる。写植印刷の時代がすぐにくる。だから改革が急がれる」と熱弁されていた若いころの永野社長の姿がよみがえります。

言われる通り、時代は高度成長時代に突入し、写植印刷時代がすぐに来て、一気にワープロからパソコンの時代に入り、パーレスの時代に突入しましたが、先代・永野社長はそれらも見越して「長寿社会」の到来を予見し、社会に役立つ「自分史づくり」の発刊を取り組みます。地味で息の長い取り組みですが、西村さんという才女を配置して丁寧に時間と金をかけて「仲間づくり」を始めたこと記憶しています。

「自分史づくり方教室」を各地で開き、

盛況のうちに仲間を増やし、その中で出された声を生かすために「かわら版」が発刊されたこと記憶しています。

戦前まで日本の歴史を語る史料

のほとんどは、為政者・権力者(文字の書ける層)の残した史料によるものが多く、生活者との関係など、その歴史の真実を明らかにすることが困難なものが多かったのも確か。だから、その時代に生きた人々が、自分の生活記録を残すことは、歴史を双方から論じることができる資料となり「歴史観を豊かにしてくれる」のは確かです。多くの生活者(庶民)が自分史を書き残す努力をしてほしいと願っています。

今後も「かわら版」が読者等の期待に応えて発刊をつけ、自分史づくりがさらに広がることを期待しております。

時代はスマホ・パーレスの時代。200号を機に「飛鳥」が先代社長の遺志を継いで頑張る若い社長と一体となって、さらなる発展・飛躍されることを祈念します。

おめでとうございます!

アトリエよくばり子リス 松田 雅子

「酔っ払いの人」から「文旦の人」へ。時はうつろうものですね。

「株式会社 飛鳥」さんには「四国写植出版制作室」の頃から大変お世話になってい



(3) かわら版

ます。森岡（旧姓）雅子著「愛すべき酔っ払いに捧ぐ」、松田雅子著「文旦好きがこうじて」、そして編集に関わらせていただいた松崎淳子著「土佐寿司の本」、他社でお世話になった「草やのごはん」と合わせると、人生の中で、県内ベストセラーの1位の嬉しさを4度も味わわせていただいたことになりました。記録することの大切さを教えてくださり、きめ細かなアドバイスや、丁寧な編集作業で対応してくださった皆様、本当にありがとうございます。大変なお仕事と並行して発行し続けた「かわら版」には、飛鳥さん、そして私たちの貴重な歴史が詰まっています。

夜討ち朝駆けの新聞作り

高知県職連合副委員長 谷 英樹

「かわら版」発刊2000号、おめでとうございます。飛鳥の前身「四国写植」からのお付き合いで37年余が経過、「ああ、もうそんなになるのか」と感じ入っております。1982年、高知県職員労働組合の新聞編集の仕事に就いた私は、ガリ版刷りばかりうじて知っていたものの、「カタカタコトトン」とリズムカルな写真植字の機械は珍しく、「へえ、こうやって新聞をつくるのか」とびっくりしたものです。

当時月3回の新聞発行に追われ、夜討ち朝駆けの毎日、深夜に四国写植を出てその

ままお町に飲みに行くという毎日を繰り返していました。社員の川田さん、中内さんはその時からの付き合いです。先代の社長にも「はよう、原稿を書いて」とたいちゃー怒られたものです。

しばらく、新聞編集の仕事は遠のいていましたが、ただいま現在またお世話になっている次第。昔と違って何もかもメールでデータ渡し。四国写植でうんうん唸りながら原稿を書きしていた時代とはまさに隔世の感。次の3000号のときは生きているかしらん？ とにかくおめでとうございました。

今はむかし（かわら版1号のころ）

元飛鳥社員 西村多津子

かわら版2000号 おめでとうございます。そしておがましいですが、ありがとうございます。私は、「自分史かわら版」1号発行のころに思いを馳せています。

1986（昭和61）年4月、それまで写植（写真植字）で印刷のニーズに应运えられた職場が、四国写植出版制作室を立ち上げました。自分史作り方教室開催。講師は「自分史マニュアルノート」開発者（大阪）福山琢磨氏。場所は高知市中央公民館で超満員です。当日のアンケートに励みされ「自分史かわら版」1号をやっと7月に発行しました。仕事で新聞やチラシなど手

がけてきましたが、原稿の無い、自社の印刷物ははじめてのこと。封筒の表書きは勿論手書き、3つ折り。発送して、お盆休みに入りました。休みが終わって出社すると「かわら版」の反響の郵便の山。書きたい方はいっぱい居られるのだ」と、随分励まされました。社長運転の車で、県下東へ西へ。毎日毎日自分史マニュアルノートの注文ハガキを頼りにお客様宅におじゃましました。

この30余年の印刷業界は、産業革命（今は個人でパソコンをお持ちの方がフツツですもの）です。自分史第1号は、窪川町の川上明さん。原稿用紙550枚、きれいな文字でビッシリ。「大正に生まれ昭和へー七十余年の日々」「挫折しそうになったとき、読書好きの中学生の孫が待ち望んでくれて勇気づけられた。題も孫がつけた」と。文字入力力は電算写植機がいったばかりの職場。漢字プリンターでの校正。翌年のかわら版4号で（第1号「自分史」完成）の報告と孫・敦也さんの（おじいちゃんはずばらしい 体験者は正しい歴史の記録をもとに）の感想文。10号では「頼もしい助っ人君」と電算写植出力機の紹介をスタッフがしています。また、同人誌編集に集まった年輩のご婦人。文字変換がまちがって出力されたのを見て「人間なら間違いもあります」が、機械がまちがうはずがありません」と真顔でつめよられた（笑）のも今はむかし。



記憶は一代、記録は末代。福山氏の言葉です。

飛鳥の会社概要に「出版物は計算しつくされた芸術品であり、変わらず在りつづける雄弁な語り部である。」そのとおり益々のご発展を

頑張りに拍手

元 飛鳥社員 河野美智子

2012年の175号からは、読者として「かわら版」を楽しんでいます。やっと刷り上がった達成感が味わえなくなったのはちょっと淋しいですが、何年経っても半分裏側から覗くような気持ちで開いている自分が居て苦笑。「キルギスからの手紙」「いろいろかいろ」「わが家の太郎」の連載は当時からで、筆者の方々(太郎も...)の健在に力を頂きます。

時代の変化が加速する中で『飛鳥かわら版』が続いている幸せと、続けている人たちの頑張りに拍手です。これからも、アットホームな「飛鳥」を紙面に載せて届けてください。

おかげさま

飛鳥常務取締役 永野 雅子

昭和61年7月に発行したかわら版が

200号を迎えました。縮刷版の頁をめくると、あの時この時のことが蘇ってきて感慨も一入です。若かりし日の夫や社員の皆さん、社屋の新築・移転、進化する設備、目まぐるしい業界の変革、夫との突然の別れ、大波小波をかくぐって今があります。夫が生前言っていたことば「自分の力じゃない、沢山の方に助け、支えてもらった」。本当にその通り、「おかげさま」としか言葉が見当たりません。

今、時代は私達が想像もしなかった方向に変わろうとしています。私自身、若い人たちの会話の内容がさっぱりわからないことがあります。

でもいいのです。教えてもらいながら、これからも飛鳥の繁栄と、かわら版を読んでもくださるお客様のために、社員の皆さんと共に一歩一歩、歩んでいきたいと思っています。

心の通った仕事を

飛鳥統括部長 川田 道彦

飛鳥に入社して早40年の時が経ってしまいました。その間に、たくさんのお客様との出会い、そしてお付き合いの中で多くのことを学ぶことが出来ました。

特に出版の仕事では、人生の大先輩方が歩んで来られた貴重な体験などを聞かせていただく機会に恵まれ、大変勉強になりました。

ました。そしてそのことが自分の考え方や生き方に随分と活かされて来たように思います。すべてのお客様に感謝の気持ちでいっぱいです。

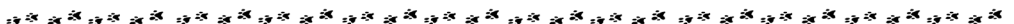
時代とともに技術進歩などで、印刷・出版の仕事内容も随分と変わってきたけれど、これからも、お客様と心の通った仕事を基本に、は変わらずに続けていきたいと思っています。

かわら版とともに

飛鳥社員 中村 和史

社内では印刷オペレータの仕事をしています。そんな私がかわら版に携わることになったのは、今から25年前の時、入社してからでした。その入社したての時、印刷オペレータの先輩に付いて印刷を勉強することになりました。その頃の私は印刷についての知識など殆どなく、右も左もわからず毎日が不安で一杯でした。失敗も沢山ありました。ですが、先輩や会社の周りの人達が時に厳しく指導され、時に優しく助けて頂き、その甲斐あって今では印刷もできるようにになりました。

かわら版の印刷も20年くらいずっと私がついてきました。これからも250号・300号とどれくらい私が携われるかわかりませんが、これからもかわら版とともに歩んでいきたいです。



(5) かわら版

美しいやんばるの森を舞台に、沖縄の心を伝える絵本が、完成寸前になって出版中止が言い渡された。編集者のMさんは、2度も、やんばるの森深く取材に付き合ってくれたのに。Mさんも諦め切れないのだろう。ストーリーの書き換えを、いくつか提案してきた。しかし、あくまでも、軍事基地反対運動のプロパガンダの絵本ではなくて、子どもたちのほんとの生活を表現したもので、片寄ったところなどない。子どもたちを裏切ることはできない。うそを描くことはできない。

多くの絵本の中で、一番子どもたちに人気があるのは「じごくのそうべえ」だ。この絵本を出版してくれている童心社から、電話が

おのころじま 大奮闘記

ふんせんき

田島征彦

18. やんばるの少年 (2)

あつて、出かけて行った。元編集長のSさんは、「やんばるの少年」のダミーを見て、「もつと思ひ切った描き方をしないと、気持が、子どもたちに伝わりにくいよ」と言われてしまった。出版中止を解いてもらおうと、ぼくは恥ずかしいことだが、中途半端な内容になりかけていたのかも知れない。

「ベンシヤーンのような力強い叫びがあった方が良くないですか」とまで言われた。

この取材にはいって、一年目だったと思う。沖縄戦は南部は激しかったが北部やんばるはアメリカ軍の攻撃が無かったように聞かされた。



しかし、事実はそうでなかったことが、今になって明らかになってきたのだ。NHKドキュメンタリー「僕は少年ゲリラ兵だった」のDVDを見せてもらって初めて知ったのだ。戦争から70年以上も経って当事者たちがやっと口を開き始めた。

14才から17才までの少年たちが、苛酷な訓練を受けてゲリラ兵にされた。まだあどけない子どもが、殺人鬼となり、非情な経験をさせられて、精神的に余りにも残酷な苦しみのため、家族にも告げることなく、長い年月、口を閉ざしていたのだ。

NHKプロデューサーは激しい取材拒否に合った。その中で少しずつ口を開く人たちが現れて、約十万人の遊撃隊のことが解明されかけている。

その事実も少し入れることでも、「やんばるの少年」は厚みを増したように思う。発想から5年、絵本は出版された。

共同通信が取り上げたこともあり、全国の10誌に余る新聞社が取り上げてくれた。

これからも、ぼくは日本全国を絵本の原画を展示して廻ってゆくつもりだ。

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄県高江集落に通って「やんばるの少年」を制作。昨年5月完成した。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

植野雅枝さんは歯がゆかった。約二〇年前、大方(現・黒潮)町の自宅で小中高生に勉強を教えていたが、地元で三百年もの間、大切に遇されている隣国の少女の墓について話題にすると、誰も知らないのだ。すぐ近くに住む子でさえそうだった。

豊臣秀吉による朝鮮出兵が悲しい歴史を生んだ。大方町史によると、二度目の慶長の役(一五九七〜九八年)で出兵した地元の豪族、小谷与十郎は朝鮮から一人の少女を連れて来た。少女は機織り技術を伝え、地元で愛される一方で、望郷の念を抱いたまま亡くなったという。小谷家は、死後しばらくした一七〇〇年ごろに「朝鮮国女の墓」を作り、代々手厚く守ってきた。

絵本を作ったら読んでもらえるかな。植野さんが試みに書き始めると、すらすら言葉が湧いてくる。高校の国語科教諭だった夫の末丸さん(故人)に見せると、「よく書けているねえ」。その言葉に背中を押された。

問題は二〇〇万円もの自費出版費だった。絵描きに頼むとさらなる出費になると悩んでいたら、絵の具も持っていなかった末丸さん

大澤 重人

絵本が結ぶ日韓交流



植野さん(中央の車いす)と金院長(右端)らの前で、朝鮮の歌「トラジ」を披露する黒潮町立上川口小学校の児童ら＝黒潮町で

が「わしが描いちゃる」。思わぬ幸運もあった。宿毛市に完成した中筋川ダム湖の愛称募集で、植野さんの「螢湖」が採用されたのだ。賞金が入り、費用の半分がまかなえた。

そうして一九九七年に誕生したのが、夫婦合作の絵本「むくげの花の少女」(飛鳥出版室)。むくげは朝鮮の花で、少女の家の庭にたくさん花開いていたという逸話から題名にした。

読んだ人たちに共感の輪が広がり、韓国語版、英語版も発行。新聞記事で紹介され、全国から墓参りに訪れるようになった。日本語版は現在、三刷を数えている。植野さんはこの二〇年間、墓の近くにある町立上川口小学校で五年生に絵本を読み、国籍や民族で分け隔てをする愚かさを話してきた。

『少女はどこで生まれたの』と聞かれて困ってしまった。植野さんが漏らした言葉を受け止めたのが、絵本に感動し、訪ねた在日コリアンの医師、姜健栄さん(八二)＝大阪市平野区＝と、知

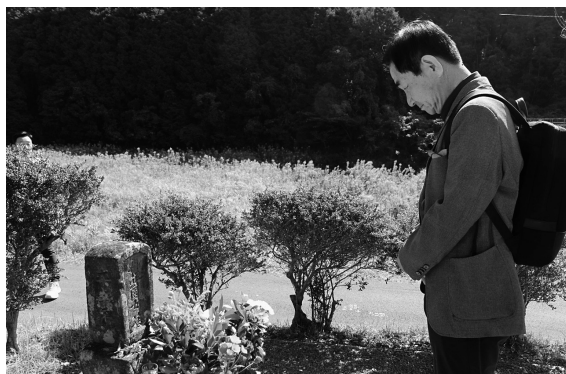


絵本「むくげの花の少女」

人で大阪八尾南福音教会の福島敏雄牧師(七二)だ。

二人は教会人脈を頼って少女の故郷探しを始めた。少女の名前もわからず、韓国側にも文献資料がない。調査は難航したが、与十郎が従軍した長宗我部元親の侵攻ルートで養蚕業が盛んな場所を絞ると、少女が連行されたという言い伝えが残る地域があった。韓国南部にある全羅北道南原市郊外の寿洞マウル。釜山から約一五〇キロ西北西に位置する。現地調査には、南原文化院の金注完院長(七〇)も同行し、故郷とほぼ特定できたという。

「現地で慰霊祭ができれば」と二人は願った。福島牧師が昨年初めてに渡韓し、南原市長に訴えたところ、「飛び上がって驚く」展



「朝鮮国女の墓」に頭を下げる金院長＝黒潮町で

開になった。金院長が昨年十月中旬、ドキュメンタリーの撮影チームとともに黒潮町を訪ねたのだ。少女の墓に手を合わせるなどし、四日間にわたり、調査と撮影を進めた。直前に退院したばかりの植野さんも車いすで一行の墓参りを見守り、「絵本を書いてよかった。交流が続いていければいいねえ」と笑みを見せた。

絵本には、願望を込めて書いた場面があった。近くの小学生が墓参りし、「悲しい人生を終えた少女の物語を先生から聞くのです」。執筆当時は、そんなことは全くな

かった。しかし、今では――。一行の墓参りには

上川口小の数人の児童が同行し、植野さんや

金院長らの前で朝鮮の歌「トラ

ジ」を披露した。長年の活動で願

望は現実のものとなっていた。

現在八二歳の植野さんには新

たな願いがある。「墓の一带にむくげの花を

いっぱい咲かせたい」。少女の家のもくげが死

後は咲かなくなると伝え聞き、絵本出版後に数本植えていたが、

今、花を咲かせるのは一本のみになっている。

南原市側では、寿洞マウルでの慰霊碑建立の計画も持ち上がり、

墓を守り続けた小谷家の子孫も招待したいという。一行と面談した

小谷鉄夫さん（八四）は「大変うれしい。できるだけ応えたい」と

声を弾ませる。日韓関係が深刻化



する中、約六〇〇キロ離れた南原市

と黒潮町の人たちが海を越えて相互訪問するなどの交流が始まりそ

うな予感だ。

むくげは韓国語で、限りなく咲き続けるムグンファ（無窮花）と呼ばれる。悲しい歴史から友好の

歴史へ。一足早く絵本のむくげが大輪を咲かせようとしている。

ドキュメンタリー収録のため、

★ ★

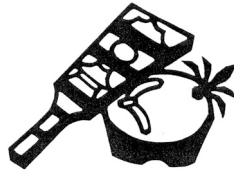
昨年十一月にも南原市を訪ねた福島牧師によると、南原文化院は一時間のドキュメンタリー映画「朝鮮国女」と本を完成させ、韓国国内で無料公開・配布する予定。その一方で、長宗我部軍は南原市ではなく、東寄りの別のルートの侵攻に帯同したとされる資料も現地に残されており、少女の故郷について再調査する動きもあるという。

おおざわ・しげと 渡来人歴史館（大津市）専門員兼多文化共生支援センター（滋賀県草津市）ライター。元毎日新聞高知支局長。著書に「泣くのはあした―従軍看護婦、九五歳の歩跡」（第二六回高知出版学術賞特別賞）など。一九八号で紹介した俳優の土平ドンペイさんのロングインタビューの出版準備を進めている。

★ ★

新聞社を早期退職しました。自由な立場で、在日コリアンや南米系など外国籍住民との共生を主なテーマに取材を続けます。高知勤務時代に取材した朝鮮少女の墓が進展を見せたため、「新聞余話」を休載しました。次回以降は、新聞社の外から見た視点で「新聞余話」を引き続き担当します。

い
ろ
ろ
か
い
ろ
その二十六



お正月

安藝眞一

お年玉は一円だった。昭和十六年、大東亜戦争と呼んだ太平洋戦争が始った年の正月。今から七十八年ほどの遠い日、朦朧と浮んでくる正月の朝の光。飛び上る程の

嬉しさで、ゆつくりと折りた、んだ一円の紙幣の薄い桃色と土色がかすんだ柔らかな感触が、たしかに今も手の平に残っている。屠蘇も雑煮もそこそこに縁側を駆けおりて、雨戸を引き、走り出していく先は、正月の雑沓に揺れる新京橋の広場。向かう先は唯一つ「薄荷パイプ」売りの店。硬い石で細工した小型のパイプにハツカが隠されて首にかける紐がついている。手に持ったお年玉の一円を差し出して一つのパイプを口に咥える。一息吸うと、たちどころに冷気が口にあふれ、うっとりする香りが頭の中を駆けめぐる。一円出して一つが四十五銭、お釣りの五十五銭をポケットに入れて歩き出しながら又一つ大きくパイプを吸うとハツカの匂いに、正月の空が拡がっていく快感がつづく。

幼稚園を出たばかりで、当時、国民学校と呼んでいた小学校にはまだ日が届かない歳だったが、年中通して小遣い銭を貰う事もなく一年が過ぎる日々に、格段お金欲しいとも思わぬ明け暮れだったが、夏が過ぎ、秋風が立つと、向こうに見えるのは十二月の歳の暮れの日数、その先に正月の眩しい光が一円札を持って立っている。

一年に、たゞ一つ一回限りのお年玉を手にする期待が、夏ごろからの動悸で年末に続いていく。その頃から、お年玉の狙いは、たゞ一つ「薄荷パイプ」であり、他は何もなし。来る年も来る年も、その思いだけで正月が充ちたりていた日々。いく年も、それが続いてゆく、昭和十六年、十七年。

ものごころがついて、まわりの大人の動きが判りはじめたのは、多分、幼稚園に入るころだと思いが、その頃すでに、日本は支那という今の中国と戦争をはじめていて日露戦争やら日清戦争やら、祖母父母の話は戦争のことばかりで、しかも勝ちいくさだったから、日支事変も勝って終るものだとほんやり考えていた。その所為か、正月も変りなく人々が群れた。決まって寒かった元旦の朝が明けると、はりまや橋の向こうから海鳴りのようなざわめきが沢山の下駄の音を引きずって京町を歩き新京橋の広場に渦になる。「薄荷パイプ」を咥えて人波をくぐる両脇にいくつもの見世物小屋が並んで呼び込みの声が雑沓をかけめぐる。

見世物小屋のせめぎ合いは、ぼんやりと灰色で、陽が照ると白色に反射して冬の風に波を立てる。

どの見世物も何やらインチキのつくり物で、妖しげな口上を大声で呼ぶ親方のまわりに、人だかりの波が重なって、歩けない。蜘蛛と人間の間に生まれた蜘蛛娘とか、土佐山の大鼯鼠とか。世の中に有り得ない騙しものが小屋ごとに並んで妖かしと不思議の小屋程、人だかりが押し寄せて山になる。手の中のお年玉を釣りに使って入場するでなく、前にまわり、テントの裏から覗いて眺めると、くり返して渦をくぐる。かん高い鳴物の音と口上と人波の笑い声が正月の風に流れる。戦争中も正月は続き、見世物小屋はいくつか軒をつらねた。大空襲で街が丸焼けになった後は流石に正月も鳴りをひそめたが敗戦後の焼け土に忽然と見世物小屋が並びはじめたのは中学に入る前の年か。のぞきからくりの竹囃子は消えて、リングの唄の大音声の広場に見世物小屋と賭博の小間が増えた。もう今となっては何もかも消えたがポケットにまだ五十五銭の釣銭があつて、薄荷の匂いを追いながら、遠い日の正月を今も歩いている。

了



寒い冬に思うこと

氏 原 名 美

うじはら・なみ

越知町出身。北海道大学卒。キルギス共和国ビシケク国立大学（旧称ビシケク人文大学）教授。「キルギスタン」はキルギス共和国の通称の一つ。

十月も半ばを過ぎると暖房が恋しくなる。住宅街には石炭売りが軒を並べ始め、夏はスイカを運んだトラックが積荷を石炭に換えて走りまわる。石炭は毎日飛ぶように売れているようだ。きのう歩道を塞いで山積みされていた黒い塊がきょうはきれいになくなっていく。歩道も車道も側溝の水も、何もかも石炭色に染まっていく。そろそろペチカに火を入れたい

なと思ひながら、我が家のペチカは金食い虫のガス暖房だから、しばらくはオイル式電気ストーブで寒さをしのぐ。ウズベクから言い値で輸入せざるを得ない天然ガスは高くつくが、大規模水力発電所が稼働するキルギスの電気は安いのだ。冷え込みが厳しい日には向こう三軒両隣どころか地区全域で電気ストーブのスイッチが入るものだから、この時期は停電事故が頻発する。

そうこうするうち、一日の最低気温が零度を下回るようになると、市のエネルギー供給センターが暖房用バルブを開けて給湯を開始する。しかし、恩恵を受けるのは中心街の商業ビルや集合住宅で、戸建て住宅は自前のペチカと電気ストーブに頼るしかない。

一長一短はあるもので、集合住宅は温水バルブが一棟一栓方式だから、自由は利かない。暖房は一斉に始まり一斉に終わる。暖房費は割高で部屋の広さに応じて額が決まっている。年金だけで生活している高齢者は暖房費が払えないからと言って引越していく。寒暖に応じて調整すれば少しは経済できるしエネルギーの節約にな



るのに、省エネなど考えることもなかったソビエト時代の仕組みそのままの無駄遣いをしていく。

一方、戸建て住宅は石炭にせよガスにせよ、燃料の消費量を自分である程度は調節できる。ただし、節約しすぎると寒さに震えることになる。暖冬だったらありがたい。石炭暖房は割安だが、こまめに石炭の燃えかすを掻き出しては外に捨てに行かなければならないし、煤で汚れた両手は石鹸で何度洗ってもなかなかきれいにはならない。煙突掃除も欠かせないから、手間がかかる。それでもガス暖房に比べるとはるかに安く済むし、ガスとちがって火種を残しておけば朝まで心地よい暖が残る。今年も近所の石炭屋は繁盛している。

水力発電で十分なエネルギーを生み出せるはずのキルギスだが、実は、水力発電ではなく火力発電に依存している。貯水池の下流に

位置する隣国ウズベクの農業事情が影響しているのだ。キルギスが冬に備えて貯水池を満杯にしておきたい夏、水を堰き止めてしまったらウズベクは水不足で農作物が枯れてしまう。キルギスが発電量を増やしたい冬、放水すればウズベクの畑が水に浸かる。ガスという切り札を握っているウズベクには譲歩せざるを得ない。結局、キルギスの庶民が温もりを手に入れるには石炭が手取り早いのだ。

最近ではキルギスでも環境保護の運動に積極的に参加しようとする若者が増えてきた。あるものはゴミの分別を訴え、あるものは、テンシヤン山脈の氷河を救うために化石燃料の使用を止めよう、と地球温暖化を心配する。だが、厳冬期には零下三〇度を下回るというのに、一人当たりのGDPが日本の十二分の一にも満たないこの国が石炭に代わるエネルギーを手に入れるのは容易なことではない。スウェーデンの少女のように無策の大人たちに向かって拳を振り上げる若者は、まだ現れない。

了

出版物紹介

香南赤岡浦物語



著者：野村土佐夫 編集：野村 裕
A5判 3巻組 484頁

米寿を迎えた著者が、故郷の歴史を小説にした「赤岡古昔物語」、戦中戦後の厳しい時代を生きた人々の哀歓を描いた「大正・昭和・平成のむかし話」、ご子息編集の「父母の詩歌集」の3冊をまとめて「香南 赤岡浦物語」として上梓されました。

作者のふるさとへの想いと、家族愛、生きた軌跡を、情感込めて描き出した作品集。

窪川の半世紀 武吉 東写真集



著者・発行者：武吉 東
B5判 190頁

旧窪川町に生まれ、その地で90年近くを生きて来た著者は、20歳の頃、写真を趣味にし、撮り続けた写真は数万コマをこえ、いつしか写真集を創ってみたいと考えるようになりました。

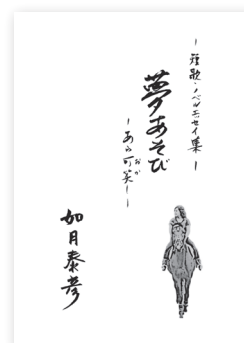
昭和26年ごろからの窪川の町や道、人々の生活を写した390点あまりの写真が収録されています。この写真集を懐かしんでくれると思っていた人々が旅立って往かれる中、若い方々に50年前、60年前の窪川の風景、当時の営みを感じとって欲しいと願い、上梓されました。



四万十町のギャラリー556で、出版記念展を開催されました

短歌・ノベルエッセイ集

夢あそび — あら可笑し —



著者：如月泰彦
A5判 98頁

69歳を迎えた著者が、「人生を楽しく、そこにドラマがあればもっと楽しい」：歌の中で文章の中で「夢あそび」をしながら旅を続けて行こうと思う」と、日常の折々を文章や短歌で綴ったエッセイ集。

平和資料館

草の家 30周年記念誌



発行所：
平和資料館・草の家
A5判 196頁

平和資料館 草の家は1989年に、平和と民主主義を守る市民の砦として開設されました。その歴史を30周年記念誌として上梓されました。



二〇一九年二月に田村

さん(旧姓谷本)が結婚

式を挙げました。田村

さんはデザインを任せれ

ば間違いない、というほ

ど飛鳥のデザイン最前線

で活躍しており、紙面

のみならずWEBも担当しています。挙

式にあたり招待状も自分で制作しており、

とつてもかわいい招待状をいただきました。

式場の飾り等も招待状と合わせてあり、

柔らかな雰囲気が素敵な式となっていました。

。思いのこもったご家族へのお手紙には、

聞いていた飛鳥の面々の目にも光るものが

。花嫁衣装の田村さんは本当に綺麗で、

また旦那さんと笑いあう姿がとても幸せ

そうで、お二人

ならきつとお互

いに支え合って

温かい家庭を築

いていけるだろ

うなと思いまし

た。

田村さん、ご

結婚おめでとう

ございます！

(平山 記)



二〇一九年も出展！

ものづくり総合技術展！

去る十一月七日～九日に

開催された「ものづくり総

合技術展」に今回も出展さ

せていただきました。

例年同様A-TOOLと

ARの2本立てで、多くの

方に弊社のシステムを体験い

ただき、実際にお仕事に繋

げることもできました！



飛鳥忘年会



十二月二十一日土曜日、

今年も忘年会が開催され

ました。今回の会場は「お

食事処みどり川」。落ち着

いた雰囲気のあるお店です。

店内も綺麗で清潔感が

ありそれでいて明るく暖か

な印象を与えてくれます。

雰囲気がいいのも好印象で

したが、何と言っても料理

が美味しかったです。

綺麗に飾られたお造りの

タタキを一口齧れば、さく

りと皮が解けわたる香りが

鼻を抜けていきました。

高知県で食べられる刺身の

中でもかなり美味しく感

じ、鮮度がとても良いのが

わかりました。

他の料理も器や食材の

組み合わせにちょっとした

驚きが組み入れられていた

り、それがまた話題になっ



たりと楽しみながら食べら
れました。

また、今年の振り返り

として各部署の代表がコメ

ントしていただきました。私達

も力を合わせ助け合いなが

らしっかりと仕事をしてい

きます。

皆様のお陰で今年の忘

年会も楽しく過ごすこと

ができました。来年も美

味しいお酒が飲めるように

成果を出していきたいと思

います。

よろしく願います。

(益井 記)

印刷屋さんの「すったもんだ」

代表取締役 永野 正将



令和2年が明けました。

本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

このかわら版も記念すべき“200号”ということで、本当に多くの皆さまにお支えいただきここまで続けて来ることができました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

思い起こせば創刊号は1986年7月「自分史かわら版」、当時は前身の四国写植出版室として発刊させていただいており、私は11歳で全く知る由もなく過ごしていた時期でした。今号に至るまで先代社長を筆頭に、常務、川田、中内、西村など沢山の飛鳥スタッフが真心を込めて34年間育んできた「かわら版」ですが、34年間発刊し続けるということがどれほど大変で忍耐のいることかと考えると「感謝」の一言につきます。

春夏秋冬の年4回発刊も現在では若干ペースダウンしておりますが、これまで同様に皆さまに楽しんでいただき紙媒体の重要性、文字の魅力、そして飛鳥の魅力を、真心を込めてしっかりとお伝えしていきたいと思います。

本年も、そして今後とも末長くよろしくお願いいたします。

わが家の太郎

47

老老介護

永野 雅子



夜中の12時、2時、4時、太郎の鳴き声が近所中に響き渡る。その度に庭に出て家の中に入れるが、2時間ほどするとまた同じこと。室内に入れて鍵をかけると、今度は外に向かって大騒ぎ。そんな夜が何日も続いて、これでは私が参ってしまうと、ほとほと困り果て、病院に行った。

先生曰く、「認知症で、柴犬はそうなる」と凶暴になる性質があります」とのこと。とりあえず安定剤と、睡眠剤を貰って帰る。すぐに安定剤を吞ますと効果てきめん、その夜は朝までぐっすり眠ってくれて、こちらもしき返った心地。一件落着かと思いきや、ひと月も経たない内にまたまた大声。夜中に安定剤を缶詰肉に混ぜて与え、それでも効かなければ今度は睡眠剤、なんか、「深夜に薬を盛る」という雰囲気。

それを2ヶ月程続けた後、とうとうそれでも効かなくなると、台所に閉じ込めた。朝まで大声で泣き続け、大暴れしてそこから中めちやめちや。起き抜けにまず片付けをして、やっとの思いで出勤する時間になるとグーグー寝ている。もう、蹴っ飛ばした

くなる。

そんなこんなの日常を、黙って見ていてくださるご近所様に「申し訳ありません」のご挨拶。皆さん「気にしなくていいですよ」と言ってくださるけれど、太郎の大声に迷惑でないはずがない。飼い主の私でさえ、もう捨てたくなる心境。

嫁に言うところ「わが家の太郎の最後に、『捨ててきました』と書いたら、お母さんの評判一気に落ちるね」ですと。

そうも言っていられないので、先生に相談。薬に対する免疫ができるそうで、許容範囲内の強い薬を貰ってくる。こんなことがいつまで続くのだろうと、いささか不安になる。

動物を飼うということは、ただ可愛いだけでは済まされない、一生の責任を持てるかということだと思いついた。喜寿を迎えた私と今年は15歳になる太郎、老老介護の日々をいかにして乗り切るか、太郎の余生をどうやって安楽に過ごさせるか、大きな課題に取り組む年になりそうである。